敦賀と芋粥について

【敦賀が舞台となっている小説】

- 平安時代後期の説話集である「今昔物語」や、これに基づいて書かれた芥川龍之介の短編小説「芋粥」の舞台が京都・敦賀であることが記述されている。

【「今昔物語」・「芋粥」の内容】

- 越前の国敦賀の豪族であり武士の藤原利仁が京の関白家に仕えていた頃、予てより「芋粥を飽きるほど食べたいものだ」と話す五位の侍の夢を叶えるため、京の都より郷里敦賀の館へ連れて行く。旅道中の様子や敦賀での歓待振りが記述されている。

【平安時代の芋粥とは】

- 芋粥は、上流貴族たちの宴に付き物の食品であった。正餐が終わった後、控えの座に移り酒肴が供され、引出物が出るまでの間に供されていた、いわばフルコースの最後のデザートであった。
- 平安時代中期の歌人　源順(みなもとのしたごう)によって編纂された日本最初の百科事典ともいえる『倭名類聚抄(わみょうるいじゅしょう)』の中で、芋粥が内臓を健やかにする料理として記載されている。